



佐々木惣一句稿 : 碧梧桐と四方太の添削

米田, 恵子

(Citation)

日本文化論年報, 27:25-45

(Issue Date)

2024-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487307>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487307>



佐々木惣一句稿——碧梧桐と四方太の添削——

米 田 恵 子

1. はじめに

山口誓子は、憲法学者でもある佐々木惣一（明治十一年（一八七八）～昭和四十年（一九六五）を「三人の父」の一人として敬愛する（注1）。筆者は、「山口誓子と佐々木惣一——「抑制」のこころ——」（『日本文化論年報』第十六号、平成二十五年 神戸大学大学院国際文化科学研究科日本学コース）および「山口誓子と佐々木惣一（補遺）」（『日本文化論年報』第十七号、平成二十六年 神戸大学大学院国際文化科学研究科日本学コース）において、山口誓子は佐々木惣一から多くを学び取り恩恵を得たこと、さらに、俳人としての佐々木惣一を浮かび上がらせることができた。

そして、今回、佐々木惣一句稿が、京都府立京都学・歴史館に所蔵されていることが分かり、若き日の佐々木惣一の俳句修行の一端が見えてきた。そのうえ、興味深いのはただの句稿ではなく、河東碧梧桐と阪本四方太という当時の『ホトトギス』の若手でこれから『ホトトギス』を担っ

ていく俳人の添削が入った句稿である。二十五歳という碧梧桐と四方太の添削である。金沢の第四高等学校生で二十歳の佐々木惣一句稿に対し二人の『ホトトギス』の俳人がどのように添削し、佐々木惣一がどのようにそれを生かしていったかということを見ていくことにする。

2. 佐々木惣一句稿の概要

句稿は、薄い半紙（246 × 344cm）を二つ折りにして一冊にとじられたものである。もちろん墨書である。二つ折りにとじられているので、半丁にだいたい六句書かれているため、一丁では十二句ということになる。そこに、阪本四方太と河東碧梧桐の添削が朱で書き込まれている。さらに詳細に見てみると、大きく七つに分けられ、次のようになる。

表1

⑦詩稿					⑥蚊柱 四	⑤蚊柱 三	④蚊柱 二	③蚊柱※(一)	②零余子 一	①零余子	丁数 全数	署名	備考
	三	二	一	丁数 全数									
	2丁	2丁	3丁	10	18丁	13丁	9丁	25丁	19丁	21丁	234	〇	
	3	6	10	全数	206	143	106	286	220	234	〇		
		1	5		6	20	38	48	30	17		◎	
			5	5		1	8	1	6				
					15								
					笹舟生	笹舟生	笹舟	—	笹舟生	笹舟生			
	無	明治三十五年十月十六日起	明治三十五年七月二十五日起		河東碧梧桐 (M 31.10.1年)	河東碧梧桐 M 31.8	河東碧梧桐 (M 31.6.17)	河東碧梧桐 (M 31.6.12)	阪本四方太 M 31.11.5	添削者未詳			

※「③蚊柱 (一)」原本には漢数字はないが、分かりやすくするためにつけた。

本文では、③「蚊柱 一」と記している。

表1のように、①～⑥が句稿であり、⑦は漢詩が書かれた詩稿である。この詩稿も、京都在住の中国人に添削を受けたようであり、句稿と同じように朱で添削されている(注2)。ただし、本稿では句稿についてのみ考察する。

句稿には、一冊を除いて「笹舟」という俳号(注3)と、

それぞれに「零余子」および「蚊柱」という

題がつけられている。「零余子」は秋の季語であり、阪本四方太に添削してもらったのが、ちょうど十一月で、秋にできた俳句を清書して添削してもらったと考えられる。また、「蚊柱」は夏の季語であり、河東碧梧桐に添削してもらった日付に矛盾はないと言える。このうち、添削の日付がはっきりしているのは、②の阪本四方太の明治三十一年十一月五日、③④にはそれぞれ六月十二日と六月十七日、また、⑤には三十一年八月、⑥は十月一日というように、碧梧桐自身によって明記されている。ただ③④⑥には年号がなく推定するしかなかったので(一)を付けている。日付からのみ推定すると、ちょうど碧梧桐が北陸への旅の途中金沢に立ち寄った時期であった。当時佐々木惣一が所属していた第四高等学校の句会である「北聲會」が、金沢を訪れた碧梧桐を歓迎するために「臨時北聲會」を開いたのが明治三十年五月三十日だという記事が新聞『日本』(六月六日付)に載っている。当初は、明治三十年の

この日に佐々木惣一は碧梧桐と初めて顔を合わせ、句稿を見せたのもこの年と推定したが、③④⑤⑥の句稿と碧梧桐の添削の内容から明治三十年ではなく明治三十一年と特定した。これについては、後にふれる。

このように、句稿は年が新しい四方太の方が先にとじられているが、年代順に見ていく方が分かりやすくなると思われるので、河東碧梧桐の③④⑤⑥について先に述べ、次に阪本四方太の順に考察する。

3. 河東碧梧桐の添削

河東碧梧桐（明治六年（一八七三）～昭和十二年（一九三七））は、高濱虚子と並び正岡子規のもとで俳句を学び、正岡子規没後は、『ホトトギス』を高濱虚子が引継ぎ、河東碧梧桐は新聞『日本』を受け継いだ俳人である。明治三十八年ころより従来の五・七・五という定型にとられない新傾向俳句を標榜し始め、明治三十九年より明治四十四年にかけて新傾向俳句の宣伝のために、二度の全国俳句行脚の旅を行った。

このように、碧梧桐が独自の俳句である新傾向俳句に傾倒していくのは明治三十八年頃なので、佐々木惣一が初め

て出会ったと思われる明治三十年五月三十日の句会的时候は、まだ独自の俳句にめざめるというよりは、『ホトトギス』の有季定型の俳句を詠んでいた時代だと考えられる。佐々木惣一の句稿への添削も有季定型を前提として見ていて、その基準も概ね正岡子規の唱えた「写生」に従っていると考えられる。

まず、河東碧梧桐がどうして金沢へ行ったのかを「ひとりたびの記」が連載された新聞『日本』や『ホトトギス』で調べてみた（注4）。

碧梧桐は、明治三十年五月十五日に新橋を発って、まず「西の京の俳友をおどろかさばや」と京都へ向かった。五月二十日、碧梧桐を歓迎する京都の「満月會」で句会が開かれ、その後、敦賀から船で金沢入りをしようとしたが、海が荒れ、船は敦賀にもどり、次は汽車で福井を経て、金沢に入った。金沢で五月三十日、第四高等学校の「臨時北聲會」の句会に出席し、六月五日には碧梧桐の送別の意味を込めた「第三回北聲會」が開かれる。碧梧桐は、六月九日、輪島を目指して出発する。六月十二日、輪島へあと一里というところで、輪島で徴兵検査があり宿をとることが難しいと聞き、穴水へ行き、そこに宿泊。六月十三日、午

に穴水を船で出港し、七尾に到着する。六月十五日、高岡の西光寺に到着。西光寺で句会があり、十七日に高岡の駅から乗り合い馬車で富山をめざし、芭蕉が訪れた市振、親不知を通って、十九日、直江津から汽車に乗り六月二十日に東京へもどったことが分かった(注5)。

このように、碧梧桐の旅程は分かったが、なぜ北陸への旅を考えたのか、その理由は「ひとりたびの記」からは分からなかった。しかし、この旅は、明治三十年一月に天然痘にかかり一カ月後退院した碧梧桐は、思いを寄せていた下宿先の高田屋の娘・とが虚子と婚約したと聞いたためのものである。その傷心は一応癒えたようであるが、「しばらく東京を離れていたいという思い」もあり、ちょうど三高から金沢の四高に転校した竹村秋竹の誘いに応えた旅であつたということである(注6)。

では、佐々木惣一が二つの句稿を碧梧桐に見せたのは、明治三十年という碧梧桐の金沢滞在中ではなく、一年後の明治三十一年だとしたのはどうしてかというところ、二つの根拠からである。一つは、明治三十一年の『ホトトギス』第十五号(三月三十日発行)に告知された「募集俳句」の「五月兼題」である「時鳥―正岡子規選」「老鶯―高濱虚子選」

「蝙蝠―下村牛半選」と、「六月兼題」である「二階―石井露月選」「門―高濱虚子選」「庭―正岡子規選」に沿ってそれぞれの兼題で数句ずつ作られている箇所があるからである。

二つ目は、『ホトトギス』第十七号(明治三十一年五月三十日発行)で「老鶯」の兼題により、高濱虚子の選で「天・地・人」のうちの「人」になった句「鶯の老いにけるかも雨三日」に対し、碧梧桐は「小生はとらず」という評を書いているのである。この句が発表された『ホトトギス』の発行は、明治三十一年五月三十日であるから、碧梧桐が添削した六月十二日には「鶯の老いにけるかも」の句を虚子が「人」という最高位に近い句と認めた句だということは知っていて、あえて「小生はとらず」と書いている。つまり、虚子は上位の俳句と認めているが、自分はそうは思わないと述べているのである。本稿では言及する余裕はないが、結婚のことといい、俳句の選に関する考え方といい、虚子と碧梧桐の確執の一端がうかがえるのは興味深いところである。

では、次に、河東碧梧桐の添削の入った「蚊柱」と表題がついた③④の句稿をそれぞれ見ていくことにする。

3. 1. ③「蚊柱 一」について

まず、③「蚊柱 一」には二八六句書かれているが、河東碧梧桐は一つ一つ丁寧に見て、全てに何かしらの添削や感想を記している。二十五歳の碧梧桐は、句会で出会っただけの二十歳の佐々木惣一を俳句を志す同志と見たのだろう。本当に一句一句丁寧に見ていることが分かる。どの句にも、傍線が引かれているが、これは、おそらくこの語句を工夫すればもう少しよくなるのに、あるいは気になる表現なので再考せよというような気持ちが込められていると考えられる。また、いいと思われる句には○がついていて、さらに◎が一句につけられている。しかし、どの句評も厳しい言葉が並んでいるのである。

句評の言葉を拾ってみよう。「意不明」「未だ尽さず」「野卑」「新俳句に類句あり」「末五わるし」「平凡」「蛇足」「乱暴」「陳腐」などあり、褒めている言葉は皆無といつてよい。最後の二十五丁オモテに、次のような碧梧桐の総評が朱で書かれている。

主観の句多きは失敗の原因なり

「にして」「何たる」「何す」の如き一時流行の語を矢鱈やたらに使用せしは失敗の原因なり

客観に句作すべきものを態と主観「主観」にしたるは未だ到らず

六月十二日 碧生 妄言妄評多罪々々

【引用において「」のついた

読み仮名は筆者。以下同じ】

この批評では、「にして」「何たる」「何す」という今流行の語を使うから失敗すると言っている。さらに、注目すべきは「客観に句作すべきものを主観にしたる」であり、正岡子規から特に高濱虚子へと受け継がれていた「客観写生」を踏襲していることがわかる批評である。

ほとんどは厳しい評価のなかで、碧梧桐が「○」をつけたのは四十八句であるが、「○」がついている句の中でも、添削がなされているのがほとんどで、以下には添削がなされていない句を挙げる。

○衣かへて髪を氣つかふ女かな

○夏瘦を弁慶の恋と申しけり

一二丁オ

三丁ウ

○ 綸^{【い】}切れて鮎^{【い】}を逸す水上の二寸かな

同

○ 狐啼く夜は子規啼かず寺

六丁オ

○ 物さげて女恥じらふ日傘かな

九丁オ

これらの句は、いわゆる「ほとゝぎす」的な従来の俳句であり、日常目にしたり耳にしたりした光景を素直に切り取り詠んだ句である。

次に、「◎」をつけた句は二八六句あるなかでわずかに一句である。

◎ 鮎^{【すし】}を壓^{【お】}す女あらはに門徒寺

十一丁オ

鮎は鮎でも「押し鮎」であろう。門徒寺なので、一向宗の寺であろうか。そこで法要でも行われるのだろう。女性が一生懸命「押し鮎」を作っているのが見えたということである。

3. 2. ④ 「蚊柱 二」について

「蚊柱 二」も丁寧な添削が施され、表紙ウラには総評と「六月十七日」という日付が書かれている。

君は感境を悟つて未だ熟し給は
ざる所あるを覺^{【さ】}れり

前日の予が評言の餘行に礼を
見えしは深く謝する所なり

本巻は前巻より大分面白く拝見
致したり

六月十七日夜 碧生妄評

「前日の予が評言の餘行に」のところは、少々未詳なところがあり「餘行に」と読んだ。「余行^{【よこう】}」は仏教用語で「念仏以外の修行」を指し、ここでは俳句の実作を本筋とするところを批評ということをしたという意味にとった。ただ、その批評に対し、佐々木惣一は礼をしたのであろう。金沢から名物を送ったのか詳細が分からないのが残念であるが、次の「深く謝する」というところには、碧梧桐の人間的な面が見える。そして、「本巻は前巻より大分面白く拝見」とあるように、「○」の句は三十八句、句数全体からすると増えていて、さらに「◎」の句は八句と多くなっている。以下に「◎」の句を挙げる。

◎水に向て螢を放つ二階かな 二丁オ

◎鐘を鑄る汗の裸や庭せまみ《裸の汗や五六人》 三丁オ

◎門前に白蓮賣るや日蓮寺 同

◎面會や監獄の庭むしあつき 四丁ウ

◎黄昏や垣を繕ふ瓜の畑 七丁オ

◎妻病んで蚊帳たたむ人の拙つたなかり 七丁ウ

◎昼顔は昼のもの夕顔は夕のもの 同

◎蚊に忍ばん洪の団扇に句を残せ《団扇の裏に》 八丁ウ

【点線は碧梧桐の添削の個所を示し、

《 》内の語句は碧梧桐の言葉である。以下同じ】

「◎」をつけた句に対しても添削は行われているが、碧梧桐がいいと認めた句は、句数全体に対しても③「蚊柱 一」と比べて多くなっている。本稿では、これだけの資料で碧梧桐の批評の特徴を指摘することまではできないが、幅広い所からの選句と言える。また、先の「蚊柱」と同じように、一句一句丁寧に見ているのは確かである。

そして、この句稿全体で印象的なのは、東京の俳壇の人たちの写真を見ての二句に続けて正岡子規を詠んだ四句、さらに違う丁には河東碧梧桐を思つて詠んだ句を書いていることである。もちろん学生である佐々木惣一は、「先賢」や「詞宗しそ」という語を用い、俳壇の諸先輩たちへの敬意を表している。

東都俳壇諸先賢の写真を見て二句 七丁ウ

◎昼顔は昼のもの夕顔は夕のもの 同

鮎の鯉に伍すべからざる恨かな 同

《自ら鮎をえて居るは抱負大なり》

子規詞宗をおもふ四句 七丁ウ

○いざり出で、夕顔に水を打たせたる 八丁オ

○病める君に蚊遣の労を執らまほし 同

○水飲に君よく論ず床ながら 同

詩人詩人をいたはる床の蚊遣かな 同

「昼顔」の句には「◎」がついている。「昼顔」は昼のもの「夕顔」は夕のものと詠むが、それぞれ東京の諸先生たちはそれぞれの顔をお持ちだ、個性豊かな俳句を作ってお

か
れ
て
い
る
。

碧梧桐詞宗を想ふ五句

八丁ウ

○遠雷や夏草伏して地震ふ《恐しき句なり》

同

ねころんで心太に万句廣き室

九丁オ

○帷子の首を垂れたる机かな

同

隣室や人一喝す昼寝時

同

○月三更詩三昧に入て蚊遣せず

同

られるということだろうか。「鮎の鯉に」には、碧梧桐の「自ら鮎をえて居るは抱負大なり」という感想が書かれている。この句も解釈はいろいろできるが、「鮎」は佐々木惣一であろうか。「鯉」は東京の諸先生たちである。なかなか「鯉」にはなれない自分を恨んでいるといえる。つまり、なかなかいい俳句は作れないという嘆きとされる。しかし、碧梧桐は、自分を「鮎」にたとえて「鮎」になっているのだから、その抱負は大きく、いつかは「鯉」になれると期待を寄せているのではないかと筆者は解釈する。

次の子規の四句のうち三句に「○」がついている。病床の子規の様子は『ホトトギス』から分かるであろうが、実際に碧梧桐から直接聞くともまた違った感慨を持ったことだろう。病床にあつて、痛みから「いざる」ように出てきて、庭の夕顔に水をやるように言ったり、子規に蚊遣をつけてもらうという光栄な時もあつたのだろう。また、水を飲むために起き上がったときには、俳句論を戦わせたようだ。病床の子規を思う気持ちに碧梧桐も共感したということであらう。

ほぼ一年前に会った碧梧桐のことを思い出して詠んだと思われる句が、八丁ウから九丁オモテにかけて五句が書

「遠雷や」の句には、碧梧桐の「恐しき句なり」という感想が書かれている。碧梧桐の金沢滞在中に地震を震わせるような雷が鳴つたのであろうか。これも、碧梧桐の偉大さに「夏草」のような自分はひれ伏すしかないという暗喩であらうか。それを感じ取つた碧梧桐は、「恐ろしき句」と書いているが、「恐れ」は「畏れ多い」という意味にもとれる。そのため、雷も恐ろしいが、佐々木惣一より年上とはいえず、二十五歳の碧梧桐である。まだまだ「畏れ多い」と思われるには若い年齢のため「恐しい」と書いたと筆者は解釈する。次の「帷子」という薄い着物を着た碧梧桐が「ひとりたびの記」や東京へ手紙を書くために座つた机を見ての句

であろう。次の「詩三昧」になっているが、句会であろうと思われる。月が三更になる、つまり夜の十二時すぎまで俳句の話をしたのである。蚊を気にすることもなく、夜遅くまで、俳句について語り合ったことは印象に残ったと言える。碧梧桐は、よく寝転んだり昼寝をしたのだらうか。さすがに「ねころんで」と「隣室や」の句には「○」はつけられていない。

このように、④「蚊柱 二」も丁寧な添削や感想が書かれているのであるが、碧梧桐の評価は③「蚊柱」と同じように、「陳腐」などという言葉もあり厳しい。

3. 3. ⑤「蚊柱 三」について

⑤「蚊柱 三」の最後の丁の十三丁オモテには、次のような碧梧桐の感想と日付が書かれている。

一言評して乱暴と

いはんか 碧

三十一年八月

日付は明治三十一年八月なので、先の③④は続き物と考え

ていいであろうが、⑤については少し日にちが過ぎてから、碧梧桐に見てもらったと言える。そのためか、一句一句丁寧に見ているとは言い難く、③④のような感想はなく、ところどころに添削があるのみである。句の数は、全部で一四三句、「○」は二十句あり、「○」のなかで添削があるのは五句である。いい句はいい句と認めているようである。ただ「◎」は一句のみである。

◎夜を起きて河を見に出る五月子水《雨》 六丁ウ

句稿では「水」となっているが、これは佐々木惣一の誤記のように思われる。碧梧桐は「五月雨」と訂正する。この句は、梅雨の大雨で出水が発生し心配になり、河の様子を見に出たということである。

この句稿⑤に対して、碧梧桐は「乱暴」と批評している。つまり、まだまだ粗削りで未熟ということであろうか。やはり、厳しい評である。実は、この朱に対して、墨書で線を何本か引いて消そうとしたような跡が見えるのである。これは、おそらく佐々木惣一が引いたものと思われる。あまりにひどく厳しい批評に落胆し、この句稿はなかったも

のとしたいという気持ちと、年もそう違わない碧梧桐に対し「なにくそ」と思い、思わず線を引いて打ち消したのではないかと筆者は想像する。

3. 4. ⑥「蚊柱 四」について

⑥「蚊柱 四」は、⑤よりももっと辛辣である。いきなり一丁オモテの六句の上の欄外に弧線を引いて「一も句をなさず」とあり、次の一丁ウラから二丁オモテにも十二句の上の欄外に弧線を引き「一も句をなさず」と続く。次の三丁ウラから四丁オモテにも同じように「一も句をなさず」と書かれている。これは、佐々木惣一にとってはショッくなことであつたろう。数か所にわたって「一句も句の体裁をなしていない」と言われているのである。

さらに、この句稿では「○」にあたるものがなく代わりに「、」がついているため、「○」にあたるものと想像されるが、以下に「、」がついている六句を挙げる。

、白瓜を市に運ぶや菰包	四丁ウ
、藁屋根の葡萄の蔓や雲涼し	七丁オ
、電線の在青田の鷺に語るらく	八丁ウ

、貨車の上に石炭量る裸かな	同
、京を距る三里茨咲く藁屋かな	十丁オ
、鮎釣や鼻禪に籠尻に水	十五丁オ

碧梧桐の選は先の句稿と同じように幅広いと言えるが、これは、佐々木惣一の句にも素材の変化が見られるようになったとも言える。「電線」「貨車」「石炭」などの素材は句稿③④⑤にはなかったものである。また、最後の「鮎釣や」の句は、思わず吹き出してしまいそうなユーモアのある句をよしとしている。

さらに、最後の十八丁ウラには、「十月一日夜 碧妄批」とあり、日付は分かるが年は書かれていない。この朱にも、⑤「蚊柱 三」と同じように、墨書で線が引かれ、意図的に消そうとしたことが分かる。これも同じように、酷評に對して、消してしまいたいという気持ちと「なにくそ」という気持ちの表れではないかと想像する。『ホトトギス』第十九号（明治三十一年七月三十日発行）の「風交欄」に「第四高校 佐々木惣一（笹舟）」と紹介されるくらいの新進の俳人であり、このことは碧梧桐も知っているはずである。それなのに褒め言葉は全くなく、手厳しい批評ばかり

の句稿に対しての佐々木惣一なりの抵抗とも言えるのではないかと推測される。

では、次に、阪本四方太の添削に移る。

4. 阪本四方太の添削

句稿①「零余子」と②「零余子 一」は、句の数は①が二三五句、②が二一〇句で①の方が多いのであるが、ほとんど句は同じである。また、①は誰に添削してもらったかは書かれていないので、阪本四方太という添削者名がはっきりしている②「零余子 一」について見ていく。

この②「零余子 一」の添削者である阪本四方太（明治六年（一八七三）〜大正六年（一九一七年））は、河東碧梧桐ほど有名ではないが、東京帝国大学附属図書館司書をしながら、正岡子規の元に集った俳人である。佐々木惣一と同じ鳥取市出身である。『新修鳥取市史 第五卷明治教育篇社会篇』（鳥取市、平成二十年）には、阪本四方太については詳しいのであるが、全体的に佐々木惣一との関係に関して、「佐々木が『卯の花會』の一員であつた確証はない。また阪本四方太との接点がどこで会つたのかも不明である。しかし、四高在学中の明治三十年「北聲會」とい

う金沢の俳句グループに属していた佐々木は『ホトトギス』（もしくは『日本』）を通して同郷の先輩である四方太と知り合い、四方太もまた、この後輩を親しく指導し、引き立てたのではあるまいか」という推量の域を出ない書き方である。しかし、この佐々木惣一の句稿②「零余子 一」により、その接点や関係があつたことは明白になった。

まず、「卯の花會」は、明治三十一年十一月十日発行の『ホトトギス』の「地方俳句界」の欄にその誕生を告げる報告が載せられている。「当地の俳壇は従来月並派に占領せられたる如き觀ありしが、数月前坂本^マ四方太氏婦郷の際卯の花會なるもの新たに起りぬ」という旧態依然とした月並な鳥取の俳壇を超えて新しい一派を形成するため、『ホトトギス』の阪本四方太を中心とした新しい会が誕生したこと、学生が中心になり毎月三回五の日に句会を催すという集まりである。この表明の数カ月前、四方太の帰郷の際に「卯の花會」ができたということであるが、明治三十一年八月二十五日付の『鳥取新報』の「文會員の集合景況」によると、八月二十四日の夜に句会が開かれ、「坂本^マ四方太氏の俳話あり清興五更に亘り後會を約し散會せり」とある。つまり、四方太を囲んで句会が開かれしめやかに優雅に会は

進み、明け方近くまで及んだということである。『ホトトギス』入選を目指す鳥取の学生を中心とした会員たちは有意義な時を過ごしたにちがいない。九月二日の『鳥取新報』には佐々木惣一(笹舟)と四方太の句が四句ずつ掲載されているが、おそらく八月二十四日に行われた句会で発表された句であると思われる。さらに、九月五日にも句会が開かれ、佐々木惣一(笹舟)と四方太の句が四句ずつ掲載されている。この時も四方太と佐々木惣一は出席したと思われる。この句会では、前回よりも出席者も増え、「各吟ふしう懷ひさを披ひらきて清談に時を移し」たということである。このように、『鳥取新報』の記事から、佐々木惣一は四方太と郷里の鳥取で出会っていたことは間違いないと思われる。

そのうえ、②『零余子 一』には、「四方太詞伯に會す三句」という前書がある句も見いだすことができた。その句は次のようである。

四方太詞伯に會す三句	四丁オ
割て赤き皮真青なる西瓜あり	同
蜻蛉や千里の馬の尾を負ふて	同
それ／＼の味や渋柿砂糖柿	同

「西瓜」「蜻蛉」「柿」と秋の季語であり、一緒に西瓜を食べ、自分は蜻蛉のように小さな存在であるが、『ホトトギス』の先輩である四方太を千里を走る名馬にたとえ、その名馬の尾にとまっている蜻蛉が馬を背負っていると表現する。つまり将来自分が『ホトトギス』を背負うのだという大胆な決意を表しているとも解釈できる。また、柿も渋柿甘柿といろいろあるように、俳人たちの考えも千差万別であるということを暗示しているのであろうか。

このように、明治三十一年八月二十四日と九月五日の句会には、阪本四方太とともに佐々木惣一も出席していたと考えられる。接点が不明ということではなく、実際に句会に出席し、その後佐々木惣一は自分の句稿②「零余子 一」を九月か十月中に阪本四方太に送ったのでないかと思われる。そして、阪本四方太が佐々木惣一の句稿「零余子 一」の添削を終えたのが、句稿の最後の十九丁オモテに書かれている「明治三十一年十一月五日 妄批 四方太」となる。また、第3章において、句稿③「蚊柱 一」④「蚊柱 二」の年代を特定するときに、『ホトトギス』の「募集俳句」の兼題を参考にしたが、句稿②「零余子 一」におい

でも同じことが行われている。つまり、句稿②の六丁ウラには「駕」を詠んだ句が五句、少しおいて九丁ウラから十丁オモテにも数句書かれ、八丁ウラから九丁オモテにかけて「船」を詠んだ句が並ぶ。また、十丁オモテからウラにかけて自転車、水車など「車」を詠んだ句が書かれている。この「駕」「船」「車」は、『ホトトギス』第二十号（明治三十一年八月三十一日発行）に発表された十一月の兼題であり、選者は順に内藤鳴雪・正岡子規・河東碧梧桐である。

では、阪本四方太の添削はどのようなものであったのか。結論を言えば、碧梧桐ほど丁寧な添削ではないことは確かである。四方太は「妄批」と書くが、決して碧梧桐のような酷評もなく、強いて言えば、静かな添削と言うことができる。全部で二百二十句ある句のうち、「○」は三十句で「○○」と二つついている句がある。これは「◎」と判断し、第2章の表1に示したように六句ある。つまり、いい句には「○」をつけ、もう一度目を通してみてさらにいい句に「○○」を付け加えたと考えられるからである。また、碧梧桐は気になる語句には傍線を引いていたが、阪本四方太は「△」が付されている。「△」なので、それがつけられた語句は、もう少し工夫すればよくなるのに、あるいは

再考を要するというような意味で付されているといっているだろう。

碧梧桐のように具体的な語句の添削はほとんどなくわずか七句であり、ここでは四方太の訂正がある句を挙げてみる。

○石佛はみな鼻かけて野分かな《秋の風？》

三丁オ

山村や砧うちやんで月遅し《山里は》《うちやむ》

五丁オ

◎小き籠に蟲の弱りや縁の昼《虫籠》

五丁ウ

○薄き壁に夜寒の鐘のひびくかな《き》

八丁オ

◎草も虫も石も佛の月夜かな《佛も》

十四丁

○秋風のわれに憂き髯生えしかな《行秋？》《生ふる》

十六丁オ

○松の根に紅葉掃き溜む庭廣し《集む》《ふきたまる》

十八丁オ

【点線は四方太の添削の個所を示し、

《 》内の語句は四方太の言葉である。以下同じ】

具体的に四方太の添削の語句が記されているのはこの六句のみである。《秋の風?》《行秋?》の「?」は、四方太自身もこの方がいいと思うがいかがかなという気持ちを表しているのであろう。「山村や」の句は、添削後の「山里は砧うちやむ月遅し」の方が語調が整い断然よくなっている。

また、「小き籠」は説明的になるのを防ぐ意味でも「虫籠」の方が、リズムからいってもよくなっている。七句目「松の根に」の句の「掃き溜む」は「掃き集む」か、または「ふきたまる」と変えた方がいいということを示す添削である。

このように、四方太の添削には碧梧桐にみられるような感想はなく、碧梧桐の辛辣であるが熱い添削に比べると、四方太の句は静かなむしろ冷たい感じがする添削でもある。しかし、実際に添削をしてもらう佐々木惣一の方から見ると、辛辣で酷評の碧梧桐の添削よりも、四方太の添削の方が心が落ち着く添削かもしれない。しかし、俳句が上手になりたいという気持ちからは物足りない添削かもしれないが、酷評もなく添削箇所が少ないということは、自分の力が認められたということになる。特に、郷土の先輩である阪本四方太に認められたということは自慢していいだろう。碧梧桐には辛辣に批評されたが、四方太には評価さ

れたということである。その証拠とまでは言えないかもしれないが、碧梧桐の添削である句稿⑤「蚊柱 三」⑥「蚊柱 四」の最後の丁のコメントを墨で消すようなことはない。四方太の丁寧な朱筆が残されたままである。

5. 佐々木惣一の投句

佐々木惣一は、新聞『日本』および『ホトトギス』に投句していたが、今回の「句稿」を見ていくと、興味深いことが分かった。

例えば、先に紹介した二つの拙論「山口誓子と佐々木惣一——「抑制」のころ——」（『日本文化論年報』第一六号、平成二五年 神戸大学大学院国際文化科学研究科日本学コース）および「山口誓子と佐々木惣一（補遺）」（『日本文化論年報』第一七号、平成二六年 神戸大学大学院国際文化科学研究科日本学コース）において挙げた句について、すべて、「句稿②③④⑤⑥」の中に出ている句であることが確認できた。

例えば、『ホトトギス』第十七号（明治三十一年五月三十日発行）には、佐々木惣一の句は八句、正岡子規・下村牛半・高濱虚子の選に入選している。

兼題「時鳥」 子規選

第三等

時鳥聲の僧を訪ふ山に《拙や》

蚊柱 一、五丁ウ

時鳥盜賊逃げてしまひけり

蚊柱 一、六丁オ

兼題「蝙蝠」 牛伴選

第三等

蝙蝠や化物屋敷井戸古りぬ《平凡にして趣味なし》

（元は「蝙蝠の」）

蚊柱 一、八丁オ

蝙蝠や家無き町を低う飛ぶ《町のはずれを》

蚊柱 一、八丁オ

第一等

蝙蝠や明地の多き與力町（元は「古都の街」）

蚊柱 一、七丁ウ

兼題「老鶯」 虚子選

第三等

鶯の老いたるを猶籠の中《細評に及ばず候》

蚊柱 一、七丁オ

鶯の稍老いたるを放ちけり（元は「たる」）

蚊柱 一、七丁ウ

人

鶯の老いにけるかも雨三日（元は「老いてけるかな」）

《小生はとらず》

蚊柱 一、六丁ウ

《 》は、前述のように碧梧桐の感想や言葉で、点線とその下の《 》は碧梧桐の添削後の言葉でもある。（ ）内の「元は」は佐々木惣一の句稿にあった語句で掲載句に二重傍線で示す。これは『ホトトギス』に投句するときに自分で推敲し訂正した語句である。けっして、碧梧桐や四方太に添削され、修正された句を投句していいのである。このように、佐々木惣一は、自分で助詞などを推敲し投句している。しかし、添削は俳句雑誌に投句する前にしてもらうのが普通であろうが、佐々木惣一は、すでに投句したものを碧梧桐や四方太に見せている。添削の効率としては、投句する前に見てもらって、そこでさらに推敲して提出する方がいいと思われるが、佐々木惣一はそうしていな

い。これはどういうことであろうか。

とはいももの、先に投句してくれていたため「鶯の老いにけるかも雨三日」の高濱虚子の「人」という選に対し碧梧桐の「小生はとらず」という書込みがあるので、後世の研究者には二人の確執の一端がみえて喜ばしい発見があるが、佐々木惣一自身にとってはどういう意味があるのだろうか。

ほかに例を示すと、次の『ホトトギス』第十八号（明治三十一年六月三十日発行）においても同じことが言える。

兼題「二階」（夏季結） 露月選

第三等

葉となつて實多き櫻二階を掩ふ

蚊柱 二、二丁オ

借りすむで二階に蚊遣す夫婦かな（元は「なり」）

蚊柱 二、二丁ウ

新らしき二階に客す新茶かな

蚊柱 二、五丁ウ

天

水に向つて螢を放つ二階かな（元は「向て」）

蚊柱 二、二丁オ

兼題「庭」（夏季結）

子規選

第二等

夏草や庭に好みもなかりけり《月並にをし》

（元は「夏草の」）

蚊柱 一、二十三丁オ

兼題「門」（夏季結）

第三等

門の奥深くして小き家涼し（元は「門の内」）

蚊柱 一、二十二丁ウ

鮎を壓す女あらはに門徒寺（碧梧桐は「◎」をつける）

蚊柱 一、十一丁オ

第二等

門を入る五歩に棕櫚あり花咲がず《花の咲く》

蚊柱 二、三丁ウ

「借りすむで」の句は投句においては、「夫婦なり」から「夫婦かな」と切れ字にし、投句した方がよくなっていると思われる。同じように「夏草や」の句も「夏草の」を「夏草や」

の切れ字にし、ここで詠嘆させて句に広がりを持たせている。「水に向つて螢を放つ二階かな」は石井露月の選の最高位の「天」に入っている。碧梧桐の添削でも「◎」がついている句である。確かに、二階から螢を放つという行為はあまり見かけないものであり、それを瞬時に切り取ったところに複数の俳人の共感を得たのであろう。そして、兼題「庭」の「夏草や」の碧梧桐の感想は「月並にをし」とあり、「月並であり惜しい。もう少し工夫があればよくなくなるのに」という意味であらう。二つ目の「門の奥」は、句稿では「門の内」であつたのを「奥」と変えている。もちろん「奥」の方が当然深みが増す。最後の「門に入る」の句の「花咲かず」は碧梧桐では「花の咲く」と添削している。全くの正反対の意になる。添削の興味深いところである。読み手の捉えようにより、いくらでも変化するのが俳句である。三つ目の「鮮を壓す」は正岡子規の選では第三等に入っている句であるが、碧梧桐も「◎」をつけて一番推奨している句でもある。やはり、秀でている句は誰の目でみても推薦されるということである（注7）。

このように、『ホトトギス』第十七号、十八号に掲載された俳句は「句稿」にすでに書かれた句を添削を受ける前

に自分で推敲し提出したことが分かった。その後、佐々木惣一は新聞『日本』の俳句蘭にも投句し、これも同じように「句稿」にすべて確認できた。

明治三十一年六月九日

牡丹生けて床狭き夜の牡丹かな（元は「青蛇かな」）

蚊柱 一、五丁オ

古榎伐るべかりしを若葉かな《類句なきか》

蚊柱 一、一丁オ

鶯の稍老いたるを放ちたる《ととなはず》

蚊柱 一、七丁ウ

明治三十一年六月二十五日

詩人あり南潤の百合に居をトす

蚊柱 二、六丁ウ

門を推せば棕櫚咲けり人出でず鳴子鳴る

（元は「壓せば」）

蚊柱 一、二十一丁ウ

帷子に赤きインキをこぼしたる

蚊柱 一、二十四丁オ

明治三十一年七月一日

夏瘦せて恋する狂人蛇體なり

蚊柱 一、二十丁オ

書を枕晝寝の夢や落第す

蚊柱 一、二十四丁オ

豌豆は花にして葱は坊主なり

蚊柱 一、二十四丁オ

明治三一年七月五日

輿にして白蛇をかつぐ祭かな

蚊柱 一、二十丁ウ

夕顔や詩の會果てず二階に灯 《二階の灯》

蚊柱 二、五丁ウ

三疊の間に机を移す若葉かな 《離れ家に》

蚊柱 一、九丁オ

明治三一年七月十九日

われ傘して菖蒲を妹に剪らせたる

蚊柱 二、七丁オ

五月雨に一便遅き手紙かな

蚊柱 三、五丁オ

橋づめに心太賣る假屋かな

蚊柱 三、八丁オ

明治三一年八月六日

古井戸や釣瓶に桐の花を汲む

蚊柱 一、十三丁オ

桑茂りて近き道あり妹が門 《桑茂る中を近道の隣かな》

蚊柱 二、二丁オ

自慙

鮎の鯉に伍すべからざる恨かな

《自ら鮎をえて居るは抱負大なり》

蚊柱 一、七丁ウ

明治三一年八月九日

青嵐城を望んで町に入る

蚊柱 四、十五丁オ

地藏尊の膝の下から清水かな

蚊柱 四、十五丁オ

赤松圓心の墓

茄子の畑に道曲折す宗林寺

蚊柱 四、十五丁ウ

碧梧桐の感想で《類句なきか》は「類句が他にないか」という意味であり、「ととなはず」は調べやリズムあるい

は句として整っていないという意味であろう。辛口の評であるが、これらも先に佐々木惣一が投句してからの碧梧桐の批評である。また、「桑茂りて」の句は、碧梧桐によると全く違う句に添削されている。同様に「夕顔や詩の會果てず二階に灯」は碧梧桐によると、「二階の灯」と直している。佐々木惣一は「二階に灯」がとまったというその瞬間を詠んだのであろう。この方が一瞬をとらえた句としてはいいように筆者も佐々木惣一に同感する。次の「机を移す若葉かな」の句も碧梧桐は「離れ家」と添削する。「離れ家」では裕福な家の人にみえるが、学生の佐々木惣一は「三疊の間」がふさわしいと思われる。

では次に、阪本四方太に添削してもらった句稿に関係する投句としては、『ホトトギス』（第二巻二号、明治三十一年十一月十日発行）に二句入選している。

兼題「駕」（夏季結） 鳴雪選

三等

罪を得て下る秋風駕早し

零余子 一、九丁ウ

兼題「車」（夏季結） 碧梧桐選

一點

自轉車の郊外散策や萩芒

（元は「自轉車や野にのり入るる萩芒」）

零余子 一、十丁オ

「罪を得て」は罪人の護送であろうか。「自轉車の」は碧梧桐の選に入っている。どちらの句も読む人の心に迫るような句ではないかもしれない。しかし、入選していることは、佐々木惣一の俳句が評価されていることを示す。

さて、繰り返すことになるが、先に先生や上級者に添削してもらってから、その添削を見て、さらに推敲し投句するというのが王道というものであろうが、佐々木惣一は、投句してから句稿を見せている。これはどういうことだろうか。確かに、実際に先生や上級者に自分の俳句の意図を説明して添削してもらえば、自分の俳句の到らないところを的確に添削してもらえるであろうが、この場合のようになだ添削してもらおうというだけでは、自分の意図を説明できないためかえって添削に惑わされるということも起こる。そのため、投句してから句稿を見せたとも考えられる。また、これも推測の域を出ないが、添削前の句を投句

することにより、まず自分の実力を試し、その後、先輩たちに見てもらうことで、その添削を参考に、次の作句に生かし、さらなる上達を意図しようとしたのではないかということである。佐々木惣一の句は、碧梧桐に酷評されようとも『ホトトギス』第十七、十八号の入選および新聞『日本』に掲載され、その実力は十分に認められたと言える。ただ、明治三十二年京都帝国大学に進んだ佐々木惣一は、法律の勉強が忙しくなったのと決して裕福とは言えない学生であるため勉強と生活費のため、『ホトトギス』への投句は減っていく。

しかし、晩年も俳句は詠んでいたようであり、本稿で取り上げた若き佐々木惣一が「句稿」をずっと大切に保管していたことは、初心を大切にしながらであろうか。河東碧梧桐や阪本四方太という『ホトトギス』で活躍中の俳人に添削してもらったことはいつまでも心に残ったということを示している。

6. おわりに

佐々木惣一の句稿の河東碧梧桐と阪本四方太の添削をそれぞれ「熱い添削」と「静かな添削」というような言葉で

表現したが、この二人に添削してもらった句稿は、佐々木惣一の俳句の原点と言えるであろう。まさに、この句稿を処分せずに保管していたことがその証となる。

また、二人の俳人の真筆に触れることができたのは何よりも幸せなことであった。特に碧梧桐の晩年の書と言えは六朝書といわれる独特な書であり、天性から独自の書風を持っていたかのように錯覚させられるが、添削に見られる書は修練を積んだ流麗な書であり、書の基礎はしっかりしており、基本を身に付けていることが分かった。俳句もそうかもしれないが、まず、伝統をしつかり学び、そのうえで、独自の路線を開拓していくものだということが分かったのは、多大な収穫である。また、選句にも、虚子が入選させている句を「小生はとらず」と明言しているところなど、後の碧梧桐と虚子の微妙な確執なども垣間見ることができた。

さらに、同郷の阪本四方太との関係も実際に会っていたことが明らかとなったことも収穫である。

最後に、山口誓子記念館に保管されている誓子宛ての佐々木惣一の候文の書簡の書は、墨痕あざやかな書であるが、若き佐々木惣一の癖のある楷書はどことなく若き誓子

の墨書を思い起こさせる。誓子も晩年「誓子流」という丸みを帯びた独特な書を完成させたのは、佐々木惣一の書の変遷を見てのことであろうかと想像するのは筆者だけだろうか。

注

(1) 山口誓子の「三人の父」とは、俳句での父である高濱虚子、東京帝国大学卒業後勤めた住友の上司であった川田順、そして佐々木惣一の三人である。誓子は三高時代の一時期寄宿させてもらい、東大での学資の援助をしていた人である。

(2) 葉書の資料もあり、添削を受けた中国人の名前も分かるが、詳細は未詳。

(3) 「笹舟」という俳号は、田のあぜ道を散歩しているとき、その場の実景を詠んだ「春の水笹舟一ツ流れけり」と初めて作った句から採ったことである。「春の水に流れる笹舟は、極めて小さい存在でありながら、悠然として天地をになって動くもの、と形容してもよい姿を愛した」という理由である。もちろん、「笹舟」の「笹」は「佐々木」の「佐々」を連想させるものである。(『道草記』佐々木惣一、甲鳥書林新社、昭和三十三年より)

(4) 『ホトトギス』第六号、七号、八号、九号、および新聞『日本』の記述からまとめた。特に、碧梧桐は新聞『日本』には、「ひ

とりたびの記」(明治三十年五月十九日、五月二十六日、六月二日、六月四日「ただし、五月二十六日付は「京都雑事」という題になっている)」と題して俳句を交えた紀行文を載せている。

(5) 『ホトトギス』第七号(明治三十年七月三十日発行)に淡路町人が書いた「消息」による。

(6) 『河東碧梧桐の基礎的研究』(栗田靖、翰林書房、平成十二年)より。なお、碧梧桐を招いた金沢の友人「竹村修竹」とあるのは「竹村秋竹」の誤記を思われる。本稿では、「秋竹」とした。

(7) 「山口誓子を知る―その生涯と俳句―」(米田恵子、神戸大学出版会、二〇二二年)の「第六章 三俳句の楽しみ」において、選句の不思議について述べている。

謝辞

佐々木惣一の句稿の存在をご教示いただきその複写も頂戴できたのは、神戸大学大学院法学研究科小野博司教授のおかげであり、眼福にあずかることができました。ここに深く感謝申し上げます。